

ラオス障害者就労支援事業 第一期完了報告添付資料 事業写真

1. ビジネス研修 平成23年11月5日



① 外に会場を借りて約20名の若い障害当事者にビジネス研修を行った。主にポリオ、また切断などで足、手に障害があり、なんらかの形で起業また就職を希望する若者たちである。



② 午前はそれぞれの障害史、自分自身について、どういったことを希望しているのか、実現に何が必要かを順序立てて考えて行くことの必要性など研修生各自について考え直す作業に多く時間をさいた。それぞれのモチベーションを高めるためでもある。講師がそれぞれの話をじっくり聞く形で進められていった。



③ 講師は元ラオスベンツ CEO ソム氏。今はベンツ関連会社をラオスで興し社長を務めている。10代半ばにオーストラリアに家族で移住し、多くの苦労を経て成功した人である。初めてオーストラリアに渡った時は英語もろくに話せず、普段の服も教会からの寄付だったそうだ。同じラオス人、大変苦労してきた人の言葉は研修生に大きな印象を与えた。



④ 午後は実際にビジネスプランを立てる時の必要要素の話、タイムマネジメント、予算、プレゼンテーションなど、実際の話。
普段は陽気でふざけることが好きな研修生が熱心にノートを取っていた姿が印象的だった。



- ⑤ 真面目な内容の研修ではあるが、決して堅苦しい雰囲気ではなく、笑い声の多い講義だった。ゲームのように、何か発言をした研修生にキャンディが配られたりそれをなめながらの研修だったり（写真中央）



- ⑥ ソム氏がオーストラリア生活で教育を受け長く住んでいたためか、権威主義的な教え方ではなく研修生の意見を聞き、その意見からさらに講義を進めていく方式が取られた。これは研修生にとって衝撃的だったらしく、研修後のアンケートでは「ソム氏が自分たちの話を聞いてくれたことが嬉しかった」という意見が多くみられた。

2. 車椅子製造研修 第2回～第5回



- ① 研修初日：車椅子の説明（第3回）
車椅子には様々な種類がある。また利用者それぞれに合った車椅子を作ることが重要である。写真左がタイ人講師。



- ② 第5回目の車椅子研修・車椅子の説明
第1回目の研修生が講師になりラオス人中心の研修。写真左当センター技術指導員、右講師の第1回研修生。



③ 車椅子製図（第2回）



④ 車椅子製図（第3回）



⑤ 第4回目の研修

講師にタイから車椅子会社社長、日本から大分タキ会長。タイ語とラオ語は近いのでお互いに理解できる。また、講師の人柄も大きく、会長の日本語の説明も研修生は神妙に聞き図面を引いていた。



⑥ 第5回目の研修の講師でもある当センター技術指導員。今までの4回の研修を踏まえて計画を立て、製図の復習をしていた。また今後違ったタイプのな車椅子を作ることにも関心があり勉強中である。



⑦ 溶接（3回）研修後、バイク修理の店に就職



⑧ タイヤの組み立て（第5回）



⑨ 車椅子ユーザーでもある研修生。バイクにサイドカーを付け、車椅子をのせて移動する。パワーリフティングで活躍する選手でもあるが、車椅子製造に関心を持って第二期の車椅子工房立ち上げの有力メンバーでもある。



⑩ 昼食（第4回）
研修期間中の昼食。ラオスの米、魚、焼き鳥などのおかずと。



⑪ 座面のシート（布製）を縫う（第4回）



⑫ パーツを組み立てていき調整。



⑬ 完成した車椅子（第2回）
アルミ製



⑭ 完成した車椅子（第5回）
鉄製、黒のスプレーで塗装

	第1回の研修生が講師として研修生を教え、製作された車椅子。
 ⑮ 車椅子バスケットボール用の車椅子（第4回） 5月に国立リハビリテーションセンターの体育館でラオス障害者協会主催で車椅子バスケットボールのトーナメントが行われ、そこでも使われた。	 ⑯ トーナメント会場でバスケットボール用の車椅子の状態を確認するレバノン人とカナダ人コーチ トーナメントが開催された時に車椅子を持って行きアドバイスもらった。自国でバスケット車を作ることができることは素晴らしい、また、バスケット車自体もよく出来ていると高評価だった。
 ⑰ 第2回車椅子製造研修生 この回は比較的若く、半数以上が20代前半でにぎやかな研修だった。ピースサインを横に向けるのは日本の若い女の子が好んでするポーズだと伝え、みんなで横向きピース。	 ⑱ 第5回車椅子製造研修生 後列左2名が講師の当センタースタッフ、第1回研修生。前列の車椅子が製作した車椅子3台。（研修生1名は地元での仕事が決まりこの日の早朝に出発したため映っていない）。